感情移入して小説を読む

国文学者
島内 景二



1955年、長崎県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程単位取得満期退学。博士（文学）。電気通信大学名誉教授。専門は古典文学。短歌や歴史小説も論じてきた。著書に『湖月訳　源氏物語の世界』（全6巻、花鳥社）など。NHK―FMラジオ「古典講読」担当講師。

私が最初に教壇に立ったのは、学部学生の頃の教育実習だったが、公立中学の生徒たちに、論説文の読み方を指導するのに悪戦苦闘した。

大学院生の頃には、中高一貫教育の私立校と予備校で教えた。

私立校は偏差値の高い生徒が集まっていた。論説文は、形式段落ごとに論理の組み立てを考えさせ、書き手の思考順序を見抜かせた。思考能力のある生徒は、書き手の論理構成の欠点を指摘できたし、挙げられている具体例の不適切さや、書き手が書こうとして書ききれなかったことまで見通せた。

小説は、登場人物に成りきることで、その時々の心の中の思いを追体験させた。一つの小説の中には、複数の登場人物がいるので、読者は何人もの老若男女の人生を生きられる。

忘れられないのは、「失礼ながら、先生は恋愛経験が少ないように見受けられます。それなのに、光源氏や在原業平の恋愛が理解できるのですか」と、からかわれた思い出である。「小説や物語を読んで得られる体験は、現実の経験よりも深いのだよ」と答えた。

予備校では、受験生が対象なので、制限された時間の中で正解に達するために必要な、設問の意図を把握することの大切さを教えた。

二十九歳から六十四歳までは、理工系の国立大学で、「文学」という講義科目を担当した。古典から現代文学までを論じ、人間の心とは何か、古典がなぜ現代人に必要なのかを説いた。

今、自分の教師生活を振り返って、考えていることを述べたい。

国語の入学試験においては、漢文と古文は、高得点がかなりの確率で期待できる。ただし、漢文の場合には、基本的な構文を修得すること、古文の場合には、学校文法（特に助動詞）の最低限の暗記が前提である。

現代文の場合には、論説文は、これまた高得点が期待できる。正解が一つしかない設問が、ほとんどだからである。

けれども、小説文の試験問題は、まず、満点が期待できない。特に、「この時、主人公は、どのような気持ちだったのか」という設問ほど、解答に困るものはない。

小説の読者は、千差万別であり、感受性は人さまざまである。実際、喜びと悲しみが入り交じった涙を流す時があるし、怒りと笑いが溶け合った叫びが口をついて出てくることもある。設問で、恋人から別れを告げられた主人公の心境を尋ねられたら、「悲しかった」と答えるのが正解だろうが、「ある意味でほっとした」という解答も、誤答ではないだろう。

芥川龍之介に『枯野抄』という名作がある。師である松尾芭蕉の死を見届けた弟子たちの胸中に湧き上がる複雑な思いを、掬い上げている。皆の心の根底には悲しみや喪失感がある。とこ

ろが、その悲しみの上に、一人一人の弟子たちが、別々の感情を付け加えている。それらすべてが総合されて、芭蕉の死を弟子たちがどのように異なって受け止めたかが明らかになり、芭蕉という存在の大きさが浮かび上がる。

『蜘蛛の糸』を教えていて、生徒たちの感受性の幅の大きさに驚いたことがある。教師が期待するような、「御釈迦様の広大な慈悲心をもってしても救えなかった犍陀多のエゴイズム」を読み取る生徒もいる。ところが、「蜘蛛の命を助けた犍陀多を助けられなかった御釈迦様の慈悲心の限界」を感じた生徒がいても、誤答と斥けるべきではない。御釈迦様の「出来るなら」この男を地獄から救い出してやろうという慈悲心で犍陀多ほどの悪人が救われるだろうか、という疑問に彼はたどりついている。

小説を読む醍醐味は、主人公だけでなく、登場人物の一人一人に共感したり反発したりできる点にある。芥川龍之介の『桃太郎』は、英雄である桃太郎に反発し、征伐される側の鬼に好意的に書かれている。

実は、我が国の古典文学は、このような感情移入を最大の武器として、読まれてきた。

『源氏物語』や『伊勢物語』などの研究が飛躍的に深まったのは、室町時代の後期である。宗祇や三条西実隆は、登場人物の心を読者が我が物とすることの大切さを強調した。『伊勢物語』に関する宗祇の教えを、弟子の牡丹花肖柏は『肖聞抄』に書き留めている。

業平が東下りの途中で詠んだ「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも返る波かな」（第七段）という歌について、「歌ざま、哀れ深く侍り。よく吟味すべし。理のやすく聞こゆる歌をば、なほ、深く思ひ入りて、見侍るべし」と述べる。「吟味」とは、業平の心に成りきって、その悲しみを味わう読書姿勢である。とっておきの名場面を、音読しながら感情移入を高める読み方でもある。

宗祇は、第八段の浅間の嶽を詠んだ歌についても、旅は悲しいものだが、時として珍しい景物に触れて感動することがある。「深く、工夫すべし」と述べている。「工夫」は、読者の側で少しでも業平の心に近づこうとする読書姿勢のことである。

中世の古典学が培ったのは、鑑賞力の深さである。作品の中心へと向かう求心力である。それが、登場人物への共感力を高める。

このような中世の古典学を真っ向から否定したのが、江戸時代に現れた本居宣長だった。

ところが、宣長も、道ならぬ恋に走る光源氏の心と一体化することで、彼の不義密通を純愛へと組み換えている。柏木と女三の宮の密通も、同情の涙無しには読めないと、称賛した。宣長もまた、感情移入する、主観的な読書姿勢の持ち主だった。

宣長は、古典作品には求心力を発揮したけれども、中世古典学に対しては、遠心力、さらには反発力を発揮した。自分と異なる鑑賞をした人々の主観を、自らの主観と比較することで、乗り越えたのだ。

ここに、近代的な批評文学が誕生した。本居宣長の「もののあはれ」とは、求心力と遠心力、共感力と反発力の双方を兼ね備えた無敵の読書の産物だったのである。

論説文とは、最初から客観的な分析力によって書き紡がれるものではない。

自分は、こう感じた。ほかの人は、別の感じ方をしている。どちらが深くて、どちらが浅いのか。主観の違いをもたらしたのは、読者の個性の差異なのか。それとも、文法の知識や、作品が書かれた時代の社会情勢や精神風土への理解の差異なのか。

そこを突き詰めることで、優れた論説文が生まれる。論説文には、新しい世界観が込められている。すなわち、論説の書き手は、世界の中を生かされている存在ではなく、世界を作り出す創造者に転身している。

文学作品に共感し、他者の主観に反発することで、読者は「自分」という存在の価値を発見する。ここから、自分を主人公とする唯一無二の物語が開幕するのだ。

島内先生の文章は数研出版発行の教科書『増補新版 論理国語』『高等学校 論理国語』に掲載しています。